

小田実全集（評論 第9巻）

「鎖国」の文学



講談社
小田実全集
Makoto Oda

目次

赤茶けた面積から

——「治者」と「タダの人」——

「見る」ことと「すること」

「見る」「見られる」「見返す」

で、どうなんだ？

「繁栄」の文学

「鎖国」の文学

196 148 102 72 41 6

「鎖国」の文学

赤茶けた面積から

——「治者」と「タダの人」——

1

あ、これはあの赤茶けた面積を見た眼だな、と私はふいにあらためて思った。しかし、もうそのときには、彼の眼は閉じられていて、私の思いは、見た眼だったな、とあきらかに過去形のものとなっていた。そして、それが過去形のものとなればなるほど、同じようにあの奇妙に赤茶けた面積のひろがりを見た眼である私の眼はいつそう現在形のものとなつて、つまり、私はその眼をたしかに今ももちつづけている、これからももちつづけて生きて行くよりほかにない。それは異状に重い、その重さがからだじゅうにひろがつて行くような実感で、私はその実感にむきあうようにして、すでに冷たくなり始めた高橋和巳を見ていた。と言つても、眼のあたりだけを見ていたのではない。首から下を白い清潔なシャツでおおわれた彼のむくろ全体を私は見えていて、そのむくろがまるごと眼だった。実際、そのようなものとして、彼のむくろはそのとき私のまえにあつたのだが、考えてみれば、彼の生そのものがそうだったのだろう。そして、彼の生がそんなふうなものだったとしたら、私の生きること（「生」というと、いかにもおさまりかえりすぎていて、私に似つかわしくない。それに完結してしまつているのである。生ま身のからだのにおいがしない。ナミダはあつても、汗と笑いはない）もまたそのよ

うなものとしてあつて来たし、今もあるし、これからもありつづけるよりほかにはない。

廃墟という気持はしない。廃墟ということばは、ちょうどギリシアやローマの遺跡がそうであるように、あるいはまた、ベルリンやドレスデンがかつてそうだったように（どうして、はるかに古いはずのギリシアやローマの遺跡が「ある」という現在形で、ベルリンやドレスデンの場合が「だった」という過去形なのか）、崩れかかった石造の建物がたちならび、巨大な円柱がおたがいを支えあひながら辛うじて立っているというふうな光景をさすのだろう。私と高橋が生まれ育つた大阪には、そんな立体的な光景はどこにもなかった。あるのはただ赤茶けた瓦礫の堆積で、堆積はどこまでもひろがり、つづき、それはあくまで平面で、たしかに赤茶けた面積としか言いようのないものであつた。

ここで、当時、さしもの日本第二の大都市、人口三百五十万の大阪もそうした赤茶けた面積、瓦礫の砂漠にすぎなかった、というのがふつうの言い方だろう。ただ、それは、私の実感ではない。大阪は面積にすぎなかったのではない。私にとって、その赤茶けた面積が、すなわち、大阪だった。それ以外に大阪のありようはなかった。高橋にとつても、たぶん、大阪は同じありようを示すものとしてあつたのだろう。私も彼もそのありようを見た。いや、それ以外にありようのなさを見た。

彼は、「現代における想像力の問題」という話のなかで述べている（「人間として」5号）。「二十数年たつてみると、その焼跡なんてぜんぜんありはしない。東京のどこを歩いていたら、かつて日本の首都は完全に廃墟だったというようなことを示すものはどこにも残っておりません。しかし私の頭脳の中には残っているわけです。私がよく知っているのは大阪ですけど、残っている。その焼跡のイメージを固執することによって、この現在の日本の繁栄を——繁栄そのものは民衆の力によって築か

れたものですから、それを根本から否定しようとは思いませんが——それを正当づける繁栄論というのは、はったりじゃないかというふうな立場が、そこから、体験固執というところから築かれるのです。現実のこういう賑やかな繁華街を見ても、常に私の場合ですと廃墟のイメージというのがあって、比重から言うと、いま存在しないのだけれどその廃墟のほうの側に比重をかけているわけです。」

高橋は「廃墟」ということばを使っているが、この場合、同じことだ。私もまた、彼と同じ感覚を持つ。彼のおもしろい言い方を私流にくだいて言えば、どっちが真実で、どっちが虚構か、ということだ。街を歩く。ときどき、私は、ふいに、奇妙な感覚におそわれる。眼前のビルディング、家のつらなり、自動車、人びと、そういったものすべてが途方もない虚構のように見えて来て、そのとき、私にいいようなない現実感をもって迫って来るのは、記憶のなかのあの赤茶けた面積なのだ。私は体験に固執しようとは思わない。体験が私に固執する。

赤茶けた面積のなかにいた人すべてがその面積を見たのではないと私は思う。多くの人がそこに「過去」を見ていた。建物がたち、自動車が走り、人びとが歩いているという「過去」を見ていて、面積を面積として見ていたのではない。眼前に展開していた赤茶けた面積という「現在」はあり得べくもない、あつてはならない虚構だった。そして、そのころ、人びとは「過去」とダブらせたかたちで「未来」を見ていたのだろう。その「未来」は、同じように建物がたち、自動車が走り、人びとが歩いているという「未来」で、それは「過去」とじかにつながり、虚構である、虚構にすぎない「現在」、つまり、赤茶けた面積を視界の外に放り出していった。いや、そうすることによってのみ成立した「未来」だつ

たと、そんなふうと言ったほうが正確だろう。第一、こんなただの面積にすぎないものが、どうして、大阪という大都会であり得るだろう。面積は悪夢であり、悪夢は一刻も早く忘れ去るべきものだった。そして、幸いなことに、多くの人びとにとってそれはそうなったのだが、さて、しかし、その面積を見た、見てしまった人間たちにとってはどうか。

2

『方丈記』のように万物が崩れ落ちるといふ感慨を私がそこでもったというのではない。万物が崩れ落ちるためには、まず、万物が存在しなくてはならないのだが、それは、たとえば、堀田善衛には言えても、私に言えることではない。堀田善衛の『方丈記私記』を裏うちするものは、彼が『若き日の詩人たちの肖像』のなかで書きしるした、まことに「万物」ということばがあてはまるような、ゆたかな体験だが、私にはそんな体験はかきもなかった。もちろん、そこには堀田がそうした「万物体験」をする立場に恵まれていたという事情もあつたにちがいないが、おしなべて言つて、戦争は人間の体験を貧しくいかにも貧寒としたものにさせる。体験を勝敗、あるいは、生存（はじめ前者があつて、そのうち、後者が圧倒的に強くなるだろう）に収レンさせて、ゆたかさへの可能性を封じてしまうのである。もちろん、そこに収レンされることで、体験の深さはいやおうなしに深まるだろう。しかし、それはゆたかさを犠牲にしての深さで、一口にまとめあげて言えば、戦争体験はどれもこれも瘦せている。深さは深いかも知れないが、みごとなまでに狭い穴なのである。

まして、私は子供だった。「万物」はなかった。私のからだのなかに、それはまだなかった。したがつ

て、大阪の街が焼け、赤茶けた面積のまっただなかに放り出されたとき、私は崩壊感をもったわけでもなければ喪失感に悩まされていたわけでもない。あるいは、解放感を感じたというのでもない。私はまったくあたりまえのこのようにして、面積のなかに入って行つたように思う。つまり、私は面積をまさに面積として見ていたのだろう。そうとしか言いようがない。

世代論をやるつもりはない。げんに、たとえば、石原慎太郎は私と同年だが、彼はそうした面積を見た眼をもっていないし、また、もっていないことを自分の文学のよりどころとしてしているのだろう。ただ、がいして言つて、私の言うような意味である赤茶けた面積を見た人間が私の年ごろに多いことは、これは否めない事実だ（年齢を言つておこう。私は一九三二年生まれ。高橋は私より、一歳年上であつた）。「焼跡派」とか「焼跡の世代」とかいうことばがある。それがたんに焼跡のなかで育つたという意味ではなく、それを見た世代であるという意味で使われることばなら、私もまたまぎれもなく「焼跡派」、「焼跡の世代」のひとりなのだろうが、ただ、このことばにはどこかに景気がよすぎるようなところがあつて、「バイタリテイ」とか「エネルギー」とか、あるいは、「野放図」、「無鉄砲」とか、そういったことばに呆気なく結びつけられて、かんじんのことがどこかへ行つてしまふような気がしてならない。かんじんのことがらはいくつかあつた。そして、「バイタリテイ」も「エネルギー」も、「野放図」も「無鉄砲」も、それらはむしろ附随的なことで、かんじんのことがらではなかつたように私は思う。

ひとつは、これがおそらくもつとも、カナメのことがらだったが、私たちには何にもかつぐものがなかつたということだろう。あるいは、何にも踏み台にするものがなかつた。それらすべては、赤茶

けた面積をつくり出した火焰のなかでたぶん燃えつきってしまったのだろう。私は、私の背丈だけで、赤茶けた面積のなかに立っていた。背伸びさえ私はしていなかったように思う。私の足の下は瓦礫で、きわめて安定がわるく、背伸びは危険だった。

このごろの若者なら、たとえ、中学生でも（私はその年だった）かつぐものはひとつははつきりときまつていて、それはマルクス主義だ。マルクス主義をかつげば、すべて世界は見通して、そして、たちまち、自分は正義の味方につける。いや、このごろは正義ということより抑圧された人たちの側につけるということが大切で、たとえ、マルクスにとりついたのが数日まえのことであっても、もう何年も抑圧された人たちの側に立つて来たような顔ができる。と言うより、ほんとうにそんな気持ちになれるし、なってしまうのである。あるいは、そのついでに、革命をかついで、威丈高にへつぱり腰の中年男どもをやつつけることもできるだろう。そんなのは、たんなるヒューマンリストの運動にすぎない。そんなのはたんなる体制を補充するための……私はここ何年、そうしたことをくり返してきて来たことだろう。年々歳々、ことばは同じで、ただ、若い発言者の顔がちがつていた。新しい顔が現われるのは判るが、古い顔が消えてしまうのはどうしてだろう。また、その顔はどこへ行くのか。いや、話は、戦争中のことだ。戦争末期——あの何にもかつぐものがなかった時代のことだ。ここでひとつ、ついでのことにことわっておこう。その何にもかつぐものがなかった時代というのは戦争末期のことで（たかだか、半年ほどのあいだだった）、八月十五日以後のことではない。戦争がすんだあとでは、民主主義をはじめとしていくらでもかつぐものが私たちのまえに現われ出て来た。それは今さらあらためて言うまでもないことだろう。

平和な時代なら、私たち——いや、私の話をしよう。そのほうがすべてはつきりする。私は弁護士
の息子で、それこそ、比較的言えば「ええし」のボン」で、大した「ええし」でないにしてもその自
分の社会のなかでの位置をかつぐことができたかも知れない。その上、私は大都会の生まれで、根っ
からの都会人で、それだつて鼻にかけようと思えばできただろう。しかし、この「ええし」は
単純に、また極度に飢えていた。「ええし」は、そのころ、軍需工場に勤める「産業戦士」であり、
農民であつても、私ではなかつた。それに、赤茶けた瓦礫の堆積の上に住み、なんとかしてジャガイ
モをつくろうとし土まみれになっていた人間が都会人なものか。その皮肉は、子供心にも、判つ
ていた。奇妙な、しかも、ある意味では徹底した「階級」の逆転がそこにはあつて、私はかつぐべき
ものとしての「階級」をすでに失なつていたのである。

つい数カ月まえなら、私はまだ、「聖戦」をかつぎ、「神国日本」をかつぎ、「大東亜共栄圏の樹立」
をかつぎ、天皇陛下のために死ぬ（であろう）自分をかつぐことができた。もちろん、私はまだ、赤
茶けた面積のひろがりのなかでも、それらをかついでいたが、それはいかにも自分でかついでいるこ
とが自分にもはつきりと感じとられるかつぎ方で、したがつて、いかにも、他人事だつた。タテマエ
すぎたのである。私と友人たちは、もう、たたかいそのものについて語ることはまれになつていて、
私たちの主要な話題は、かつてのように新型戦闘機のことではなくて、講談本の主人公のことだつた。
いつたい、いつのまにそんなふうなことになつてしまつていたのだろう、と言つて、講談本の主人公
のように勇気をかつぐこともなかつた。かつげば、その大言壮語も、翌日の空襲のなかで、きれいに
化けの皮をはがれた。若さをおかつぐこともなかつた。平和な時代なら心ひそかに若さをおかついで、死

ぬのには「順番」がある、老人が先に死ぬのは当然のことで自分の「順番」はずっと先のことだと「確信」できたにちがいないのだが、ここでは、その「確信」は何の役にも立たなかった。大人も子供もともに同時に火焰にまかれて死に、「順番」はどこにもなかった。あるいは、肉親をかつぐこともなかった。親は子供を愛し、子供は親を愛するものだと言張したところで、ジャガイモ一個のことで親子が殴り合いの喧嘩まですることをさげられなかった。道徳をかつぐこともなかった。それにはどこかで穴があいていて、穴があいていないと、生きて行くことはできなかつただろう。道徳がそうなら、法律はむろんそうだった。こちらから押し進んで穴をあけないかぎり、つまりは、法律を破らないかぎり、私たちは生きて行けなかつたし、生きている以上は、確実、着実に私たちは法律を破っていた。

すべてが、そのころ私たち中学生のあいだで公然と用いられていた言い方を使えば、「アホみたいなこと」になっただけで、それゆえ、私たちはかつぐべきものを失なってしまうていたのだろう。今からふり返って考えてみると、あの赤茶けた面積は試金石だったような気がしてならない。すべてがそこにおかれると「アホみたいなこと」になった。そのテストに耐えられるものは、何ひとつなかったように思う。

何もかつぐものがないということとは、逆に言うと、私たちが、何かに拘束され、何かのために生きていたのではないということだろう。「天皇陛下のために死ぬ」ということはそのころの考え方では「天皇陛下のために生きる」ことの至高の表現だったのだが、私が死ぬとしたら、たかだか火焰のなかを逃げまわって黒焦げの虫ケラのような死をとげるだけのこと、そんなことが「天皇陛下のために死ぬ」ことのどこにもつながっていないことは、私は十分に知っていた。そして、その死は、もちろん、

「お国のため」にも「大東亜共栄圏の樹立」にも、神国日本の皇統レンメンたる歴史にも、「もののふの道」にも、ありとあらゆる大目的、大義名分に結びつこうにも結びつきようのない死だった。死がそうなら、まして、私の生はそうだった。どこにも結びついて行かないものとして、私の生きていることはあつた。いや、もつと小さなことがらを考えてみてもよいだろう。私が生きていることは、たとえば、勇氣にも、親孝行にも、若さにも、どこにも結びついて行きはしなかった。私は生きていた。強いて言えば、生きているから生きていた。

何かをするために生きていたのではなかったから、私には、そのとき、何かを「しなければならぬ」という当為はなかった。くり返して言うが、「生きなければならぬ」から私は、生きていたわけではない。生きているから生きていたのである。当為もなければ、それと表裏の關係に立つ、こう「あるはず」だという必然もなかった。人間は、何かをするために生きているはず、でもなかったし、それゆえに、何かをしなければならぬこともない。あるいは、何かをして、こうあるはず、ということもなかった。ことばをかえて言えば、当為の対象となるものも、必然を保證するものも、私はともにもつていなかったのである。それゆえ、私はふしぎに自由だった。それは、たぶん、あつげらかんとした、吹き抜けたところのある自由だったのだろう。さつきも述べたように、私はそこで解放感を味わっていたわけではない。私にはその必要はなかった。理由はしごく簡単だろう。私自身が解放されたのだから。

私は奇妙にませていた。戦争が終りに近づくにつれて、大人たちが自信を失ない、彼らの背中が見えてきたということもあつた。空襲の火焰のなかで、大人たちもまた怖れ、おののき、逃げまどい、要するに、彼らもまた、人間であつた。ということは、子供同様の存在だつたということだろう。私の眼には、まさにそんなふうなものとして、大人たちは見え始めていた。

しかし、そうかと言つて、私は大人たちを馬鹿にしていたのではなかつた。それもまた、たしかなことであつたように思う。空襲の火焰のなかで逃げまどう大人たちをわらつてみることは、同じように逃げまどう自分をわらうことであつた。大人たちが方向を見失なつていたとしたら、私も同じだつた。大人たちが明日の運命を知らないように、私も知らなかつた。私もまた、大人たちと同様に人間、いや、子供であり、それ以上でも、それ以下でもなかつた。ことばをかえて言えば、私に彼らの背中が見えていたとすれば、彼らにも、もちろん、私の背中が見えていたのであり、第一、彼らの背中を見ること自体が私の背中を見ることだつた。

そこから、一種の思いやりが生まれて来たとしてもふしぎはないだろう。人間であることに對する思いやりだと言つてもよい。私は大人たちにも、また、自分にも、それを感じていた。人間のどうしようもなきに對する思いやりだと言つたほうが、もつと思いやり自体に密着した言い方かも知れない。それほど、せつぱつまつた、ぎりぎりのところまで来ているのでかえつてやさしく微笑するという感じの思いやりだつた。

それは、私が生き死にの視点からものを見始めていたからでもあるのだろう。赤茶けた面積のひろがり私が私にその視点を強いた。と言つて、人間は死ぬものである、という真理を今さららしく教えたというのではない。人間は死ぬものだが、そのとき、その場で死ぬのは、たとえば、私であつて、私以外にはなくて、他の誰かでは決してないことを、それは事実の実物教育で教えたのである。事實は、黒焦げの死体のかたちで、いくらでもころがつていた。

その視点は、異様に平等な視点だつた。「生き死に」の視点に徹して見れば、高級軍人の死もモンペ姿の闇屋らしいオバハンの死も、実際私はある駅の爆撃現場で、そうした二様の死を目撃したのだが、そこに何の変わりはなかつた。いや、ここでかんじんなことは、私が、二様の死を、「お国のため」の死とか、「壮烈なる戦死」とか、あるいは、逆に、「闇屋」、「非国民」の死とか、そういった前おきの一切つかない死として、ただの死として見る視点をすでに獲得していたという事実だろう。そして、その二つの死はただの死であるゆえに、かえつて、つながっていた。私の眼には、そんなふうに見えた。名状しがたいさびしさにみちた連帯であつたように思う。私は子供心にそうしたさびしきにとらわれていた。人間はひとりひとり死ぬ。誰もがおたがいの死を救うこともできなければ、代りになることもできない。そして、それでいて、まさにその救いのなさにおいて、人間はつながりあつていて、このつながりはどうしようもないつながりで、私はそれを断ち切ることはできない。人間は、ひとりひとり死ぬものであるとともに、ともに死ぬものであるのだろう。はつきりとそこまで私が考えていたかどうかは、知らない。ただ、たぶん、それに近いところまでは私の思考は来ていて、それゆえに、さびしきを感じ、また、さつき述べた人間のどうしようもなさに対するせつばつまつた思いやりにと

らわれていたのだろう。大げさな言い方をすれば、一種の運命的、本源的なそちらのほうは、まだよくおぼえている。人間はひとりひとり死ぬものであるとともに、ともに死ぬものである——それは裏返しにして言えば、ともに生きるものであるとともに、ひとりひとり生きるものである、ということにちがいない。赤茶けた面積のひろがりのなかで、私は、いくぶんでもそうしたことばに近いところで生きていたのだろう。ともに生きるとしても、中心に何かがあつて、たとえば、国家というものがあつて、そこに「しなければならぬ」という当為のことばでからだを結びつけながら生きていたわけではない。まして、ともに生きることが国家によつてかたちづくられた必然であつたわけでもない。

堀田善衛は『方丈記私記』のなかで、焼跡見物（それはまさに「見物」としか言いようのない異様なものであつたのではないか）に來た天皇を見た自分の激しい怒りのことを書きしるしているのだが、私なら、どうしていたことだろう。何にもものを知らない私のことだつたから、怒りはしなかつたにちがいない。ただ、もうそのときには、おじぎをしなければならぬと思つても、その当為のことばはいかにも弱く、実際のおじぎはまったく熱のこもらないかたちだけのものとなつていたことにまちはいかなかったし、それより、私は、どうしようもない異和感をからだで感じとつていて、それは、たぶん、次のようなことばでしか言いあらわし得ないものだつたらう。ともに生きるものではないな。まして、ともに死ぬものではない。彼と私のあいだに、私はどのようにしてもあのせつぱつまつた思いやりをかよわせることはできなかつたにちがいない。

赤茶けた面積が出現するまえに、圧倒的な当為と必然の世界が私のまえにあつたことは言うまでもないだろう。いや、私はまるごとその世界のなかにとらわれていた。その体験のおかげで、今日でも私は当為と必然をさし示すことばに強い本能的な抵抗をもつ。理屈ではない。それはほんとうにもつと生理的なもので、どうしても、肌になじまないのである。その言い方がもつともビツタリする。

その当為と必然の世界では、すべての当為はもつとも強大な当為にむかつて収レンしていて、そうすることが、いわば当為の、当為だった。それは言うまでもなく「日本人たるもの、天皇陛下のため

にすべて死ななければならぬ」という当為だったが、そのもつとも強大な中心の当為は、「日本人たるもの、天皇陛下のためにすべて死ぬはずである（そのようなものとして、日本人はあり、そうでないものは日本人ではない）」という必然に裏うちされていて、もろもろの必然もまた、その必然にむかつて傾斜し、収レンしていた。

三島由紀夫が求めた世界は、おそらく、そうした世界だったのだろう。そこでは、当為（それに結びついたかたちでの必然）は、等価値に並んでいるのではなかった。いや、そうあつてはならなかった（完全にすべての当為が等価値に並んでいる場合を想定してみればよい。たとえば、「子供のためにピアノを買わなければならない」という当為と「天皇陛下のために死ななければならない」という当為とが同じ平面に並ぶ場合。そうした場合を許容する世界は、もはや、当為と必然の世界ではない）。当為は「天皇陛下のために死ななければならない」を中心として、それを頂点にして、上下に、

また左右にひろがつてならば、一種のピラミッドがそこにはかたちづくられていたにちがいない。当
為のピラミッドがあれば必然のピラミッドがそれを裏うちするものとして存在するのは当然で、二つ
のピラミッドが三島由紀夫が必死に求めた世界をかたちづくっていた。そして、こんなふうに考えて
みれば、三島の世界が、イデオロギーから言つて三島と正反対の位置に立つはずの、学生革命家たち
の世界とふしぎにあい共通するものをもつていた理由も判るにちがいない。「日本人たるもの、天皇
陛下のためにすべて死ななければならぬ」という三島の当為のなかの「日本人」、「天皇陛下」とい
う二つのことばを、それぞれ、「革命家」、「革命」ということばにおきかえてみればよい。同じことは、
必然にも言えて、ここでは、それは、「革命家たるもの、革命のためにすべて死ぬはずである。」いや、
革命のために死なないような人間は、もはや、革命家ではない。もうひとつ言つて、決死の覚悟でい
ないような、そんなふうにならぬ人間は、革命家ではない。ここまで考えてみれば、若い
革命家たちの「決死」好き、もつと端的に言えば、「死」好きの意味も判るような気がする。「新左翼」
を自称するいろんな派の機関紙を見てみると何よりもめだつのは「死」という文字だが、それにしても、
「死」にただちに結びついたそうした当為でないと、どうして力が出ないようなしかけになつてい
るのだろう。これは、やはり、日本人の思考の伝統なのだろうか。ことごとくに日本人の特異性をもち出
すやり方に私は反対だが、これほどの「死」の文字の羅列は、アメリカ合州国でもつとも困難なたた
かいをしている（という）ことは、「野蠻国」のアメリカ合州国のことだ、まさにいつ射殺されるか判
らないということである）「ブラック・パンサー」党の人たちの書く文章を見てもないし、ベトナム
でも見たことがないような気がする。キューバでは、なるほど、カストロは演説のおしまいに必ず

「祖国パトリアか、しからずオんば、死ムエルテか」ととなえることになっているが、その「死ムエルテ」という文字が、たとえば、共産党の機関紙「グラマンマ」のなかで群舞するというようなことはなかった。二月革命、十月革命はどうだったのだろうか。たしかにそこには死の覚悟はあつただろうが、もつとふてぶてしく生きてやろうという意志を、私はさきによみとるのである。実際、生きようと思っていなかったら、誰が革命などするのか。革命のたたかいのなかで成果を見ずに倒れるのが革命家の道だというようなことを若い学生が言い出したりすると、私はムカムカする。困つたことに、その美辞レイ句がどれほど無責任で、ひとりよがりなものか、彼は知つてはいないのである。始めたものはおしまいまで責任をとつてもらわないと困るのである。あくまで生きて、とことんのところまで生きて、彼に革命の行く手を見さだめてもらわないと困る。途中で殺されるのは仕方がない。彼は死んだ——ただ、それだけのことだ。そのときでも、彼は、革命のたたかいのなかで殺されるのは革命家の本望だ、などとやに下つてはいけない。残念だ、おれは生きていたかつたのに残念だ、と絶叫し、あらゆる手段で生に執着し、ぶざまなまでに生に未練を残し、死ぬ。私には、それが革命家の死のありようのように思われるのだが、ほんとうに、どうして革命をするのか。生きるためなのか、それとも、死ぬためなのか。

三島由紀夫は古代ギリシアが好きだったが、私には、彼のギリシア理解は、当為と必然を通してのギリシア理解であつたように思えてならない。そして、彼はそこでも「死」が好きだったのだろう。彼がギリシア悲劇を愛好したのも当然であつたように思える。

個人的な思い出をついでに書きしるしておけば、彼がギリシア語を学び始めたのは、私が同じことばを学び始めたのと同じ時期だった。なぜこんなことを私が知っているかという、私が同じ初歩

ロシア語の教室のなかで彼を見かけたからだ（彼は私がそのころ学生だった大学に、そのためにだけ、一週に一度来ていたようだった。もつとも見かけただけで話をしたことがなかった。彼が死ぬまで、私は「正式に」会って話を交したことはない）、私と彼は、同じ古代ギリシアにまったく正反対のものを求め、また、それぞれに見出して行ったのだろう。どちらがほんとうのギリシアだったかを、ここであれこれセンサクするつもりはない。私はたしかに私のギリシアのほうがほんとうのギリシアであつたと考えるのだが、そんなことを学問的に立証したところで、まったく仕方がないことだろう。ただ、彼がどのようなギリシアをえらびとつたか、どのようなものとしてギリシアを考えていたか、自分のギリシアと引きくらべてそのことは私の興味をそそる。たとえば、さつきも書いたように、彼にとつて、ギリシアはまずギリシア悲劇のギリシアだったのだろう。私にとつて、それは、まず、ギリシア喜劇のギリシアだった。もちろん、こうした言い方はことさらにあまりにも単純化した極端な言い方で、どちらも一方的ではないか、それならホメロスはどうなのだ、という声が起つて来るにちがいないのだが、まあ、もう少し辛棒して聞いていただきたい。ことばのことを考えてみると、ギリシア語はラテン語とちがつて雑パクなゆたかさにみちた言語なのだが（早い話、ことばの数が多い）、三島由紀夫は、私の考えでは、ギリシア語をきわめてラテン語的にとつていたのではないかと思う。それは、たぶん、ラシーヌのギリシア語理解、ひいては、ギリシア理解に似かよつたものだったのだろう。ことばをかえて言えば、彼は、結局のところ、そうした雑パクなゆたかさを理解せずに終つたということなのだが、実を言うと、その雑パクなゆたかさがギリシアの本質だった。文学と言わず、政治と言わず、ギリシアもろもろにはたしかに秩序好きなところ、奔放よりも抑制を強く主張したり

するところがあるが、それはそれだけいつそうどのように抑制を加えてみてもそこからはみ出ようとするゆたかさがたしかなものとしてあつたことだろう。そして、そのゆたかさは、純粹好みの古典主義者たちの手にあまる雑バクにみちた、すくなくとも、それをおそれないでガプリとひとのみするゆたかさで、私はここらが、三島由紀夫の作品とギリシア悲劇をわかつかんじんのところなのだと思う。三島の作品の世界は、一見ケンランとして見えるが、内実は意外に貧寒としていて、美しいが、瘦せ細っている。完成して、破綻はないが、まさに、そのところで、意外にもろいところがある。ギリシア悲劇は——ホメロスと言わず、喜劇と言わず、悲劇でさえが、もつと骨太なのである。そして、気の弱い古典主義者を蒼くさせるぐらいの破綻がそこにはあつて、さて、それでかえつて平然としている。

ギリシア悲劇は、乱暴を承知で言えば、当為と必然のドラマなのだろう。運命の必然に対して、それにしたがうにせよ、さからうにせよ、そこに当為が立ちあらわれて来て、両者のあいだにドラマが成立する。ただ、この当為と必然にギリシア悲劇の作者たちは平気で穴をあけるようなことをやってのける。それが人間にそぐわないとすると、当為と必然とがかたちづくる論理と倫理をまつこうから無視する（そして、そのあとで、いかにも屁理屈めいた理屈をつける）。つまり、どのように当為と必然とが純粹な私たちであらわれ出て来ようとも、どこかで、人間くさいところがあつて、その人間くささがたとえ雑バクを意味し、通りいつべんの純粹をそこねるものであろうとも、そのまま、悲劇の世界のなかにおさめ込んでしまう。

ギリシア喜劇の世界のなかでは、そうした傾きがさらに顕著なものとなる。アリストパネスが当為

と必然から無縁の人物であったと言うのではない。彼は保守主義者で、なかなかの愛国者だったから、祖国アテナイにからみついた当為と必然は彼の作品の背骨をかたちづくっていたが、しかし、人びとはそこではまず何よりも生きていて、くらしについて、当為と必然はくらしの力によってひきずられ、あつちこつちに風穴をあけられる。アリストパネスの面白いところはそのところ、風穴のあげぐあいにあるのだが、風穴をあけられた当為と必然は人間をひきずりはしない。人間がそれらをひきずらず歩いていくのだ。

ホメロスはどうかのだろう。ついでのことに書いておきたい。そこでも、「死」は人間の必然だとしても、当為をかたちづくるバネではない。英雄たちは、死を背中にしながらも、まず生きていて、死は結果であつても、目的そのものではなかった。

5

ギリシア喜劇——と言っても、実際には、アリストパネスのことだが、彼の世界について、もう少しべつの方向から考えてみよう。彼の世界が悲劇やホメロスの世界からあきらかにちがっている、そのちがいが鋭い対比を示しているところがひとつあつて、それは、彼の世界の登場人物たちが、英雄でも王者、貴族でもなく、ホメロスの世界にあつては「人びと」ということばでまさに簡単にひとまとめにしてかたづけられていた「タダの人」であつたということだ。その「タダの人」が、ここでは、ひとりひとり、英雄、王者、貴族に劣らぬ個性をもつ人間として立ちあらわれて来るのだが、この事実、彼の作品の世界と当為と必然とのかかわりあいに大きな意味をもっているように私には思えて

ならない。一口に言えば、当為も必然も、「タダの人」のサイズをはるかにこえてしまっている。何やら大げさすぎて、彼の登場人物たちにはふさわしくない。

あの赤茶けた面積の上で、私は徹底して「タダの人」だったのだろう。いや、そこではじめて、そうした人間である自分の本質をからだで感じとつたのにちがいない。それまで、私は何やらいろんなものをかついでいて、踏み台にしている、「日本人たるもの、天皇陛下のためにすべて死ななければならぬ」という当為と、「日本人たるもの、天皇陛下のためにすべて死ぬはずだ（そのようなものとして日本人はあり、そうでないものは日本人でない）」という必然にまで達するだけの背丈もついていたのにちがいない。そして、赤茶けた面積を眼にしたとき、私はもうそうした踏み台をもたないまま瓦礫の上に立っていて、それは、私が「タダの人」としての私の背丈になったということだが、そのとき、そうした当為と必然はいかにも自分からかけ離れた、大げさなものに見えた。私と私の仲間が、当時、もう戦争の話をまるつきりしなくなつたということの背景には、「皇軍」の戦果ががんばしくないという明瞭な理由のほかに、そうした事情がひそんでいたにちがいない。戦争のことを話せば必ずどこかでその当為と必然とにからむ、それらにぶちあたることになる。それを私たちは子供心におそれていたのだろう。そうした当為と必然は、たしかに子供心にもあまりにも大げさで、何やら気恥しいものに見えていたのにちがいない。

当為と必然のことはを口にしつつづけていると、それはふだんのくらしのことはよりいちだんと調子の高いことばであるゆえだろう、話しているうちに、だんだんと声が上ずって、自分のいつもの地声から離れて行く。思わず、尻上りにかんだかい声になってしまうのである。これはご自分でやつてみ

られると判ることだが、学生たちの政治集会へ行ってみられてもよい。そこはきつと当為と必然のこ
とばに充滿した、したがって尻上りのかんだかい声以外にどのような声も聞きとることができない場
所であるのにきまつているが、そうした声の尻上り現象は、自分を当為と必然の高みにあわせようと
する努力から生まれて来る、それこそ必然の現象なのにちがいない。ふつうの声で語るには、おそら
く、当為と必然は調子が高すぎ、また、大げさすぎるのだ。そして、学生たちが、ことさらに彼らの
ふだんのくらしからかけ離れた難解なことばと言いまわしで語るのも、その高みに自分を押し上げる
ための精いっぱい努力のあらわれなのだろう。

アリストパネスは、作品のなかで、声の調子をたかめてはいない。日本の学生たちとちがつて、彼
の作中人物たちは、ふだんのくらしのままのことばで語り、地声でしゃべる。ということは、やはり、
いくらふだんのくらしのことばで哲学を語ったという古代ギリシアでも（ソクラテスが自分は散髪屋
や靴屋のことばで哲学を語ると言ったのは有名な話だ。しかし、悲劇のギリシア語が喜劇の場合のよ
うに、ふだんのくらしのギリシア語でなかったことも、ここで注意しておきたい）、当為と必然がな
かなか彼の世界には入りにくかったということだろう。ここで、アリストパネスが、たとえば、男女
のロマンスだけを現実のもろもろから切り離してとり上げる作家なら（同じギリシア喜劇の場合で
言うなら、メナンドロスがそうだっただろう）、当為と必然なしに作品の世界をかたちづくるのはた
いしてむつかしいことではなかったにちがいない。困ったことに、彼は、ベトナム戦争ならぬペロポ
ンネソス戦争反対を正面から作品の主題としてとり上げたりする、きわめて「政治的」な作家だった。
そして、当為と必然ほど、政治を主題にした作品をつくり上げるのに好都合な手だてはないのである。

その手だてなしに、手だてに附随するおごそかなことばなしに、彼はどのようにして政治を自分の世界のなかにひき入れることができたか。そのひとつの答——みごとな答が『リューンストラテ』だろう。

ギリシア文学の世界で、必然をつくり出すのは運命だった。それは人間よりもはるかに強大で、次の二つの当為がそこから生まれて来るのだろう。ひとつは、その運命の動きに身をまかせなければならぬという当為。もうひとつは、運命の動きにさからってまで自分は動かなければならぬという当為。二つの当為と必然はぶつかりあい、火花を散らし、そこに悲劇が生まれて来るのだが、どちらの当為にせよ、「タダの人」には大きすぎて、身の丈にあまってしまうことはさきに述べた。第一、まず、「運命」というようなことばは、トロイの落城にさいしての英雄たちにふさわしいようなことばで、十ぱひとからげの「人びと」^{ラオイ}には大げさすぎて、むしろ、滑稽だったにちがいない。その「人びと」^{オイ}——アリストパネスの登場人物たちにとっては、運命とはそのことばであらためて考えてみるまでもないことから、彼らはそれほど無力で、今さら「運命にしたがわなければならぬ」と決意することもなかった。彼らはいつだつて運命にしたがつて来て、それで辛うじて生きて来たのではない。まして、運命にさからうことなど、その当為など、彼らにとつては考えられもしないことであつたにちがいない。運命にさからうためには、運命のよつて立つ原理にまっこうから対立することのできる何ものか、たとえば、傷つけられた名誉とか、恥とか、そうしたものが必要だったのだが、それらは英雄たちのものであつても、わが愛すべきアリストパネスの登場人物たちのものではなかつた。

いつだったか、「治者の文学」ということを言い出した人があつた。議論の詳細は知らないの
こではことばだけを借りることになるが、私には、そうした文学がもしあるとすれば、当為と必然を
基軸にした文学であるような気がしてならない。理由はすでにあきらかだろう。それは、自分のくら
しを運命とか歴史とか国家とか、そうしたいかにも必然ということばにふさわしい巨大なものにただ
ちに結びつけて考えられる人間、つまりは、「治者」の視点によつてしかかたちづくり得ない文学で、
その巨大なものにしたがうにせよ、さからうにせよ、彼の当為は必然の巨大さのみあうだけの、たと
え大きさにおいて劣るとしても、たとえば、それだけの力と深さをもっているにちがいない。ことに、
その力と深さのありようが説得力をもつてあきらかにされるのは当為が必然にさからう場合で、その
ときには、当為の背後には、それを支えるものとして、必然の原理に正面きつてたちむかえるだけの
何ものかがある。もちろん、そんなふうにして必然にさからうことで、彼は「治者」の位置からすべ
り落ちるかも知れないが、それは見かけの上だけのことで、彼はその自分の当為を支える何ものかに
よつて、さらにいつそう「治者」の位置に立つ。運命の必然をも自分の足下においたほんとうの「治
者」に、そのとき、彼はなつていたのである。

ここで、「被治者の文学」を考えてみることができる。くだくだしくは書かない。アリストパネス
の文学がそうであつたように、「タダの人」の文学のことだ。と言うと、現代文学の大半はそういう
文学だということになるが（「治者の文学」論議のひとつの焦点は、「治者の文学」がないということ

だったかと思う)、ただ、この場合でも、見かけの上はともかく、ほんとうのところは「治者の文学」である、意図に反してそうなってしまうている文学はこれまでいくつもあつたし、今もあるように思う。たとえば、プロレタリア文学だ。そのすべてとは言わない。しかし、かなり多くの作品がそんなふうなありようを示すものとして、私の眼に映じる。

もちろん、それらはまず「被治者」を主人公にしたものであるにちがいない。ただときとして、主人公は「タダの人」である自分を忘れて——いや、こんな言い方はよくない。彼は「タダの人」であることを忘れはしない。すくなくとも、忘れないでいようと努力をする。ただ、彼の必然にさからう当為のよりどころとなる何ものかは、この場合、マルクス主義で、それは、往々にして、あまりに強力すぎる。それは、彼がたたかう相手である必然を根こそぎくつがえすものとして彼のまえにあらわれて来るのだが（天皇制資本主義国家の必然にマルクス主義を対置して考えてみよう）、彼はそれを武器として強力な当為をかたちづくるのだが、そのあまりの強力さのゆえに、いつのまにか、彼は自分が「タダの人」であることを忘れる。いや、忘れはしない。忘れはしないままで——そう、自分の当為をかつぐ。踏み台にする。たぶん、「治者」、ほんとうの「治者」である巨人レーニンの高みのところにも、自分を引き上げる。地面から足を離れたままで、地面を見下すことを始める。つまり、声がいづのまにか上ずってしまっているのである。尻上りに上り、一オクターブも二オクターブも高い声になってしまっているのである。「タダの人」の声である地声はどこへ行ってしまったのか。あるいは、地声であいかかわらず語りつづけている、かんじんの「人びと」の地声はどこへ消え去ってしまったのだろうか。

私は文学のことを語りながら、若い学生たちの政治集会のことも、いつのまにか語ってしまったようなようだ。いや、政治そのもののもとも論じかけているのだろう。

7

私は、高橋和巳の文学は、「治者の文学」を求めていたものであったように思う。と言つても、彼の求めていたものは、想像力の世界のなかで運命の必然をも自分の足下においたほんとうの、「治者」の文学で、彼自身、自分をそうした「治者」としての人間につくりかえることに大きな興味をもつていたように見える。彼が全共闘運動に大きな共感をもち、なかにのめり込んで行つたのも、その運動のなかにほんとうの「治者」であろうとする真面目な欲求を見出していたからだろう。彼はその運動のなかからその欲求をとり出し、強化し、拡大し、そうしたかたちで、全共闘運動を理解し、評価した。彼が「治者の文学」を求めていたと言つても、「人びと」^{ラオイ}からかけ離れたところにそれを求めたと言うのではない。彼の考えたのは、「人びと」^{ラオイ}そのものを、「治者」とすることであつた。そのためには、まず、十ばひとからげに存在している、いや、存在させられてしまつてゐる（そういうふう^{ラオイ}に存在させたのは、権力ばかりでなかつた。これまでの反権力運動も同罪だつた）「人びと」^{ラオイ}にひとりひとりの人間をとり戻させ、そのひとりひとりが自分の意志と力で自分の当為を見さだめ、そこに自分の全存在をゆだねる——それは、まさしく、「人びと」^{ラオイ}がほんとうの「治者」となる道だろう。もちろん、現実の世界のなかでは、その努力は失敗するにちがいないが、まさにその失敗そのもののなかで、「人びと」^{ラオイ}は必然を自分の足の下におき、その意味でほんとうの「治者」となつてゐる。

私がさつき述べたプロレタリア文学の場合とのちがいはあきらかだろう。ここでは、主人公はたとえ「治者」となつても、「人びと」は永久に「被治者」として残されているのだ。高橋の場合はちがう。実現はともあれ、すくなくともその彼の意図において、そのところは根本的にちがつていふように思う。そして、もうひとつ、根本的なちがいが、彼の文学とプロレタリア文学とのあいだにはあつて、これは彼にとつて途方もなく苦しいちがいのだ。いや、ちがいだつた。

それは、一口に言えば、何ものか——必然にさからう当為の根拠となる何ものかが、彼の場合、マルクス主義ではなかつた、ということにちがいない。いや、この言い方は誤解を招く。何ものかのなかにはあきらかにマルクス主義もふくみ込まれていたことだろう。アナーキズムもマルクス主義以上にあつたかも知れない。ただそれが何であれ、彼は、それを、かつてのプロレタリア文学がマルクス主義をそうしたように、天下無敵のニシキのミハタとしてかかげることはできなかった、論理から言うてできないばかりでなくそれを自らに禁じることを彼は自分の当為の倫理にしていた。実際、彼のまえに立ちあらわれたマルクス主義は、すでにスターリニズムに汚れ、内ゲバに汚れ、革命の名による、組織の名による人民蔑視に汚れていた。アナーキズムはマルクス主義に比べて、それほど汚れはひどくなかつただろう。しかし、それだけでは、どのようにも当為を実現することはできないと高橋は考えていたのにちがいない。その彼には、どのようににしても当為のニシキのミハタはなかつた。すくなくとも、それは自分以外にはなかつた。

全共闘運動——なかでも「ノンセクト・ラジカル」という名で自らを呼び他からも呼ばれた一群の若者たちは、彼らがもしセクトの秘密予備軍でないのなら、高橋と同じところに立つていたのである。

それゆえ、高橋は彼らに共感をもち、彼らもまた高橋の言説に心動かされたのにちがいない。彼らの当為のよりどころもまた、自分以外にはなかった。いや、自分は、それだけでは、まだよりどころとはならない。現在の自分を否定する自分、その否定にむかつて進む自分——当為のよりどころとして、他人に、また、誰よりも自分にむかつてさし出すことのできるものは、そこにしかなかった。「自己否定」ということばがあのように流行したのも、こんなふうを考えてみると判るような気がする。具体的に言えば、「自己否定」を原理として、また、それをめざして行なう当為の行動——それが、当為そのもののよりどころとなった。高橋の場合も同じだっただろう。いや、高橋の場合、学生の場合と比べて、その当為の行動は誰よりも自分に立ちかえつて来て、それだけいつそう彼の苦しみは深く、また、鋭かった。彼はそのあたりの彼自身のありようを、『わが解体』のなかで克明に記している。

そして、こうした当為と当為のよりどころの関係は、一種の自転車操業のかたちに学生たちを追い込んで（行動していないかぎり、当為のよりどころは消えるのである。よりどころが消えてしまえば行動の意味はなくなるので、いつそう彼らは行動に駆り立てられる。おしまいには、政治的にまったく無意味どころか、自己破壊——まさしく「自己否定」だ——の行動にまで駆り立てられて、これは、まったくどうしようもない悪循環だ）、学生たちは疲れ、憔悴し、あげくのはて、いつのまにか、ただよりどころをつくるためにのみ行動している、あたかもそんなふうにして動いている自分を見出す（「占拠」、「封鎖」にくたびれはてた学生たちが、ひそかに教授たちに機動隊導入を「懇願」したというのはよく聞く話だ）。

そこまで袋小路に追いつめられたとき、学生たちのとった方法は、およそ、次の四つだった。

ひとつは、これは残念ながら大多数の学生のとつた方法だが、それまで必死にさからっていた運命の必然（大げさな言い方だが、学生たちは、たとえば、自分の就職をまさに「運命の必然」のようにみなしている。それは、学生たちと少し話してみれば、たちどころに判ることだ。「運命の必然」のようにみなして、どんなセクトの猛者もそれには手をふれない）にもう一度、自分をゆだねる道である。「この運命の必然にしたがわなければならない。」彼らは自分に言い、それから、あわててつけ加えることだろう。「人間、食わなければならんからな。」

これは、これまでに何万度、何十万度、何百万度となくくり返されて来た陳腐な図式だ。十代で革命家、三十代で「マイ・ホーム」のよきパパ——いや、そのうち、彼らは、「治者」となるだろう。高橋が意図し、彼ら自身が意図したほんとうの「治者」とはまったく正反対の位置に立つ「治者」となって、その上で、うそぶくだろう。馬鹿を言え。こつちこそ、ほんとうの「治者」だ。あんな観念のオバケではない。人民のことだつて、おれのほうがほんとうに考えている。おれはほんとうに現実の世界のなかで動いているんだからな。

二番目の方法は、簡単に言ってしまうば、マルクス主義を行動原理、当為の原理としている政治集団、つまり、セクトに加わることである。彼らはそこで、あるいは、そこに加わる過程のなかで、自分の当為の強力なよりどころとして、マルクス主義を「発見」し、身につける。ほんとうに、いつたい、どれほどの数の学生たちが運動のなかでマルクス主義を「発見」して行ったことか。運動に加わって三日で「発見」した気の早い学生もいた。十日かかった学生もいた。一年で「発見」したおくての学生もいた。私が直接間接に見知っていた学生たちについてだけ言っても、三日、十日、一年というよ

うなさまざまな場合をもつが、おしなべて言えることは、マルクス主義を「発見」することで、彼らが強く、なつたことだろう。自分のしていることに自信をもつようになったと言ったほうがよいかも知れない。そして、その自信は往々にして威丈高な言説となつてたちあらわれて来て、それまでふつうのことばでトツトツとしゃべり、私を感動させもしていた学生が、突然、上ずつた声で尻上りに、あの政治集会での難解で画一的な演説を始める。あるいは、文章がわるくなるのである。それまで、未熟ながら、自分で考え抜いたことがよく判る文章を書いていた学生が、ピラによくあるような明快で同時に難解な、型にはまつた文章を書き始める——と言つても、それこそ、それは彼にとつて必然のことだったのだろう。彼は自分の考えだけではどうしようもないところまで追い込まれてしまつていたので。思いきり背丈をのびしてみたが、もうちよつとのところ、とどかない。彼はそんな感じをもつて日を暮して来ていたのにちがいないのだ。そして、マルクス主義は、たしかに、世界を見わたせる強力な原理なのである。同時に、その強力さゆえに、ときとして、「タダの人」のことを、「タダの人」に根ざしている原理であるにもかかわらず、いや、ときには、たぶんそれゆえに、忘れてしまえる原理でもある。

もちろん、セクトに加つたところで、彼の問題は解決しないにちがいない。彼が就職という「運命の必然」にどう対処するか。これまでのところ、若い学生たちが当為のよりどころとしているマルクス主義はその必然に対して何の答も出していないようである。「就職転向」は、おかげで、いぜんとしてつづく。

袋小路に追い込められた学生たちがとつた方法の第三は、ほんとうの「治者」となる道を想像力の

世界のなかに求めることである。いや、そもそも全共闘運動には、フランスの五月革命の学生たちの運動と同じように、現実の世界と想像力の世界の境界がはっきりしない、と言うよりは、境界をぶちこわそうとする動きから始まったものだ。「想像力が権力を奪う」というはやりことばが端的にそうした事情をあきらかにしているにちがいないが、二つの世界の境界が（すくなくとも、学生たちの想像力の世界それ自体のなかで）ぶちこわされている以上、この方法はむしろ自然な帰結だろう。実際、どこまでが政治で、どこまでが文学なのか、という未分明のところは全共闘運動のなかにあつて、そこが力を生み出していたにちがいない。たとえば、これは「人間として」の討論のなかで高橋和巳が言っていたことだが（「人間として」2号）、ふつう文学の世界、想像力の世界のなかでしかあり得なかつた極限状況を学生たちは人為的につくり上げ（彼があげていた例は、たしか、赤軍派の「ハイジャック」事件だった）、ふだんは日常生活のなかに拡散してしまっている問題や矛盾をくつきりとあらわし出す。ことばをかえて言えば、日常のなかに「非日常」をぶち込むということだが、もちろん、そういう人為的な極限状況を実際につくり出すわけにはいかないのです、それは、ふだんのくらしのなかで、できるかぎり、「非日常」をかかえて生きるということになる。そうしたくらしのありようが私の言うほんとうの「治者」となる道を想像力の世界のなかに求めるということなのだが、そうは言っても、それがえてしてただのひとりよがりになるものだと私は言おうとしているのではない。あるいは、「非日常」をかかえて生きている人間が、どのように衝撃的な思想をつくり出すかというようなことをここであらためて言うつもりもない。どちらにせよ、そんなことは自明のことで、私はそれより、「非日常」をかかえて生きている人間が現実の政治の場で、ときとして大きな力をあらわすこと

に眼を注いでおきたいのである。この方法をとった学生たちが将来そうなるかどうかは別として、「ベトナム」(「ベトナムに平和を！」市民連合) というような運動も、そうした人間たちによって多分に支えられて来た運動なのだが、ただ、その場合、彼らの多くは、ほんとうの、「治者」であることよりもっとほかのものになっている、あるいは、そうあるうとしていているように見えて、そのものの名前を一口で言うなら、「タダの人」だ。

第四番目、おしまいの方は、当為と必然の世界にまるつきり背を向けてしまふ道である。人間は当為をもたなければならぬという、それまでに自分が考えていた必然をきつぱりと拒否するのである。あらゆるものから自分は自由にならなければならぬ。そして、そのあらゆるものは、往々にして、運動そのものをふくむ。

これは、ヒッピーたちの生き方だろう。学生たちの一部は、実際そうした生き方を始め、詩を書き、マンガを描き、アングラ芝居を上演し、雑誌を出す。あるいは、そうしたこと一切もそこにとらわれることだとして、何もしない。何もしないことをする。ただ、くらす。ただ、くらすことをする。

これは、実は全共闘運動のもうひとつの側面ではなかったかと思う。そもそものはじまりから潜在的にそうした側面を運動はもっていて、同じことは五月革命にもまさしく言えることだが、それが運動にこれまでの学生運動になかった色どりをあたえ、あるいは、もつと根本的に言えば、当為と必然を求める態度とともに、運動の起爆剤だった。

次のように言えば、ことがらの本質ははつきりする。最初にあつたのは、「体制」という一種のはやりことばをあえてここで使えば(私がここで言う「体制」はたんに政治制度の問題ではない。学生

というひとりの人間の上にのしかかつて、彼の生き方を先駆的にさだめているもろもろ——私の言いたいことはそれで、そのなかには、きみ、それは思ひすごしだよ、というものまで入っているにちがいない。しかし、彼が感じる以上、それはそこに重圧としてある。客観的にどうかということではない。彼にとつてどうか、という問題なのである)、「体制」が押しつける当為と必然だった。学生たちはそれをまつこうから拒否しようとしたのだが、ただ、そのやり方は、これまでのように、べつの当為と必然を背後にした上で、その力によつて拒否したのではなかった。彼らは、ただ、拒否した。もうひとつ、はやりことばを使つて言えば、ただ、「ノン」と言った。

私は、これはいへんにヒッピー的、すくなくとも、ヒッピー的考え方の一面を示していることがらであると思う。そのあと、全共闘運動は、新しい当為と必然をつくり出す方向に進んだのだが、たぶん、彼らが「ノン」と叫んだその瞬間の解放感、運動が停滞し、あるいは、暗礁にのり上げたときたちかえつて来る原点として、全共闘運動のなかにありつづけて来たにちがいない。いや、原点というより、それはいつでも運動の停滞をつき破る起爆剤だったのだろう。私はくり返してそうした瞬間のことを誇らしげに語る学生たちに何人ともなく出会った。彼らのことばを使つて言えば、どのように「ショウモウしている」顔も、それを語るときだけは、自信にみちた明るい顔になる。

その解放感をふだんのくらしのなかに持続させようとしたのが、ヒッピーだと言えるだろう。そのためには、どのようなみごとな当為、必然であれ、彼らはそこに自分を結びつけることを拒否する。私は、全共闘運動のなかに、多かれ少かれ、そうした態度を読みとるのだが、全共闘運動に何よりも「治者」的なものを求める高橋和巳がそこでもつとも見ていなかっただけのものはその態度だっただろう。運動

はその態度をひきずって歩き、それゆえにこれまでになかった運動のありようを見せたのだが、同時に、それゆえに崩壊をはやめもした。

ふだんのくらしのなかで解放感を持続させるのは、容易なことではない。それは、一方が自発的であり、他方が状況に押されてそうなただけのことだというちがいはあつても、赤茶けた面積の上で生きるよりほかに方法はないことだろう。そこでは、さきに述べたように、私は解放感を味わっていたのではない。解放そのものだった。しかし、ほんとうのところ、その赤茶けた面積は、今、どこにあるのか。

(ここでつけたしとして、三島由紀夫の文学と政治について一言述べておこう。彼の文学と政治が「治者」のそれであつたこと、すくなくとも、それを求めたものであつたことはこれまでに私が述べて来たことからあきらかだろうが、そこで、彼は高橋とつながり、全共闘の学生たちと一脈あい通じるものをおたがいに感じとつていたのにちがいない。そして、どこで、くいちがっていたか——私はすでに十分述べた。)

8

赤茶けた面積のことに立ち戻つて考えてみたい。それは、これまでに述べて来たことをまとめ上げて言えば、当為と必然が崩れて、ただの瓦礫に化してしまつた状態だつた。そこから、今日まであとを残すさまざまな態度が生まれて来たのだが、それについて少し考えてみたい。

なかでもつとも安易なのは、いったん瓦礫と化してしまつた当為と必然を、もう一度、よみがえら

せる態度だった。もちろん、そうは言っても、「天皇陛下のため」という大義名分がそのままのかたちでふたたび立ちあらわれて来たというのではない。大義名分は、今度は、「民主主義のため」だった。それにやがて重なり合うかたちで「(民主主義国家であるわが) 祖国をまもるため」という大義名分があらわれて来て、その大義名分の上に当為と必然がかたちづくられる。そして、さらにその上に「(民主主義国家日本の象徴である) 天皇陛下のため」という大義名分がゆつくりと重ね合わせられつつあることも、いま見逃してはならない事実だろう。

赤茶けた面積のなかから生まれて来たもうひとつの態度は、これは第一の安易な態度とどこかで、たぶん、その安易さにおいて癒着しているように思えてならないものだが、崩れ落ちた当為と必然に代るものとして、マルクス主義という同じように強力な当為と必然を外からもち込む態度だった。これは、ひよつとしたら、ほんとうに「天皇陛下のため」を「革命のため」にすりかえただけのものであったかも知れない。その安易さとおそろしさはのちに次第にあきらかになった。

第三の態度は、新しい当為と必然をつくり出す態度だった。これは高橋和巳が意図し、全共闘運動の学生たちがそれぞれに追求めようとしたものだが、その芽は、すでに、戦後、赤茶けた面積のなかに芽ばえていたように思う。しかし、その芽は、すぐさま、より強力な第二の態度によつて、そのときは根こそぎにされてしまったのだろう。二十何年か経つて、突然、その芽はよみがえった。すくなくとも、高橋和巳というあの赤茶けた面積を見た人間にとつてはそうだったのにちがいない。彼はそうした意味のことを、ことばをかえ、言い方をかえ、よく私に言った。

第四番目の態度は、これは私にとつてはよみがえりだったという意味において面積に芽があつたと

言うのだが、すべての当為と必然を拒否する態度だろう。それが現実の世界のなかで可能なことなのかどうか、私は問わない。ただ、ヒッピーたちといて（もちろん、その全部ではない。ある者とだ）、私はその面積のひろがりのまっただなかにいた自分、解放そのものだった自分を、もう一度、私自身のからだのなかに感じとつたことが何度となくあった。

しかし、私はヒッピーではないだろう。多くの点で私は彼らに自分と共通するものを感じながら、それでいて、自分が彼らではないことを感じていて、それは、私のほうが彼らよりもっと「タダの人」であるからである、いや、そんなふうには自分のことを彼らよりもおそらく激しくとらえているからなのにならぬ。これは私の文学のありよう、政治のありようにならぬ。いやおうなしにやらされて来ることだが、私があの赤茶けた面積からもっとも強く精神というよりからだで受けとめたのは、私が「タダの人」であるという事実、そして、その認識だったのだろう。そのときから、どこへ行っても、何をしても、私としても、私はその事実と認識から逃れられない気持がする。実際、どこへ行っても、何をしても、私は、その事実と認識を通して人間を見、ものごとを眺めて来ているのだろう。そして、そのとき私の基準となるものは、人間であれ事物であれ、それが私にとってともに生きるもの、ともに死ぬものであるかどうか、ともに生きるもの、死ぬものどうしのあいだにあるあのせつぱまった思いやりを通わせられ得るものであるかどうか、ということにあつて、当為と必然ではなかった。それは、私自身について言えば、当為と必然なしに、私がむき出しに世界にむき合っているということだろう。いや、ほんとうのところは、「タダの人」である私は世界にむき合うほど巨大な背丈をもつていなくて、世界にまき込まれてしまっているのだが、それでいて、世界が押しつけて来る当為と必然の重圧の下で、

自分自身をとり残している。そこから、からだをはみ出させている。と言つても、私はそうしたことを、べつの当為と必然をとり入れたたり、つくり出したりすることによつてするのではなくて、どのような当為も必然もからだに入り込んで行かない、どんなふうにしてもからだを受けつけない——そうした自分のありようをもちつづけることで行なおうとするのだが、そのためには、たとえ政治の領域にあつても、そして、どのような状況をまえにしても、ふだんのくらしのことばを使つて、地声で語りつづける必要があるにちがいない。より文学にひきつけて言えば、私は私自身の『女の平和』を書きつづける必要があるのだろう。当為と必然をもたないままで、つまりは「タダの人」である自分にあくまで根をおきながら、しかし、いや、まさにそれゆえに、「政治的」であることを避けないつもりなら。そして、ほんとうのところは、この世界のなかで、誰が「政治的」であることを避けられるのだろう。よほどの「治者」でなければ、誰にもそうした力はない。まして、「タダの人」である私にはない。

つづきは製品版でお読みください。